SFS通信

2012年(平成24年)7月3日発行
日本ボーイスカウト新潟連盟
スカウトフェローシップ委員会
編集長　杉山　剛
〒959－2658胎内市西条602－11
TEL & FAX 0254－43－4879
事務局　〒951-8052　新潟市中央区下大川前通4の町
TEL 025-229-5454 FAX 025-229-5446

平成24年度総会

6月3日
パストラル長岡

＜理事会・総会での井上理事長挨拶＞

90周年式典を含む全国大会に出席しました。その機会にあらためて県の50周年記念誌を紐解きました。諸先輩方は実によく頑張っておられることが分かります。それでも加盟員減少の現実が・・。大変な時代ですが、いや、この時代だからこそスカウティングの価値を確認し前進していきましょう。私たちはこのすぐれた教育法、スカウティングこそが青少年を導く最良の方法であることを信じ、先人の志を胸に、一歩ずつ歩いていこうではありあませんか。

今年度のスカウトフォーラム(福島)のメインテーマは「より良い世界を創ろう」です。その中のサブテーマに「環境破壊や自然災害に備える」があります。この課題を私たちも共有していきたいものです。

＜24年度活動計画＞

事業スローガン

”スカウト運動の基本にもとづいて、よりよいスカウトを育てよう！”

～まずは班長教育の徹底！～

スカウト運動が社会に理解されるためには、立派なスカウトを世に送り出すほかにない。
スカウト、指導者の自覚と資質向上を目的とする諸行事、研修を開催する。

1. スカウト行事:　各ラリーの的確、安全な開催。PRに努める。一般児童の参加も指向する。
2. 指導者の資質向上と研修:　WB研修所は新体系への移行準備。団委員長会同開催。
3. 運営委員会の活性化:　特に16NJ特別委員会設置。
4. SFS・YNW活動の充実

＜各委員会報告＞

指導者養成:

BS講習会(4. 08下越地区)(7. 01上越地区)
(11. 10新潟地区)(11. 25中越地区)
WB研(BS)(5. 03－5阿賀野市)
WB研(VS)(10. 06－8阿賀野市)
安全セミナー(5. 06阿賀野市)
スキルトレーニング(野営技能)(未定)

＜団50年章を受けとる白根第一団、加茂第一団＞

野外活動:GAT(4. 28－29中止)　BSラリー(6. 24鳥屋野潟公園)　CSラリー(9. 09弥彦公園)
進歩:VS隼章推進。信仰奨励賞宗教章の援助に新枠組みを検討する。
組織拡張:募集活動へのてこ入れ策として団委員長会同を10～11月に開催。
財政:維持会の一般財団法人への移行は認可待ちの状態。
国際:23WSJのホームステー関連検討中。その他日韓、日米フォーラムの支援。
SFS:SFS通信継続発行。ラリーでの募集活動を各地区に普及させたい。
YNW:今年は正副委員長とも女性が引っ張っていく。

＜総会情報＞

＊表彰：たか章・・秋山祐成氏（上越5）、かっこう章・・渡辺誠氏（白根1）が受章されました。
　　団50年章・・白根第一団、加茂第一団

＊H23年度　　富士章：鈴木依未加（新潟15）
　　菊章：藤田一輝（加茂1）、番場佑輔（加茂1）、飯田豊（新潟5）、竹中悠（新潟5）

＊22WSJ（スウェーデン）：2011.7.27-8.08　日本派遣団はスカウト789人を含む総勢985 人
　　参加者：副派遣団長中野充（加茂1）隊指導者小柳真人（加茂1）
　　スカウト：新潟5・・2人　　新潟15・・3人　　小千谷1・・2人

＜16NJ情報＞

＊16NJ特別委員会が設置されました。委員長は今井浩二氏（加茂1）です。

＊参加費は日連5万円を含め、総額14万円を上限とする方針です。スカウトが元気に活動できるよう、往路は飛行機の利用を想定しています。

＊テントはマーキー利用で酷暑の住環境を和らげます。さらに簡易ベットや遮熱帽も検討対象です。

＊調理燃料はカセットガスとの日連方針です。コンロの費用など悩ましいところです。

＊「千羽朱鷺プロジェクト」

16NJ提供プログラムとして、県内スカウトで千羽朱鷺を折り、朱鷺の成長と大震災復興、平和友情を祈る活動を行います。準備が整い次第各団に詳細説明を行います。各団の活動の中に取り入れをお願いします。

＜23WSJ情報＞

＊総額35億円に対し、参加費27億円。不足額8億円を国、経済界、各種団体への協力要請そして自助努力でまかなう方針です。自助努力の一部として協賛金を募集することになりました。

「みんなで第23回世界スカウトジャンボリーを成功させよう」協賛金

新潟県連担当は100万円（1口5万円×20口）です。H24年からH25年までの3年間分割でもOK。各団1口目標になりそうです。詳しくは10月理事会で。

＜90周年きずなウォーキング＞

4月1日から来年の3月まで全国スカウトで90万km歩こうというプロジェクトです。日連ホームページから各団の参加状況を確認しました。6月10日現在では全国で281団が登録していました。新潟県では全32団のうち登録は3ケ団しかありませんでした。新潟第15団の22位998kmが最高。ちなみに全国第1位は3,252kmというとてつもない団です。
このプロゼクトはスカウトに楽しみを与えるものです。せっかくの武器ですのでぜひご利用ください。

＜GAT中止＞

4月28・29日みつき沢で開催予定であった、ゴールデンアロートレーニングは中止になりました。
理由は、みつき沢近傍（野営場内ではない）で高い濃度の放射能が検出（民間機関）され、参加人数が減少したためです。その後、県の正式な測定でみつき沢野営場内（2ヵ所）での濃度は基準値以下であることが報告されました。

＜団情報＞

＊加茂第一団：発団50周年記念祝賀会を7月22日に開催します。

＊新潟第五団：発団60周年記念祝賀会を10月7日に開催します。

＜日連情報＞

＊中期事業目標では100人に0．8人のスカウトとなっています。この目標に対して各団の状況はいかがでしょうか。一度各団のテリトリーでの青少年人数を把握なさることをお勧めします。

リレー寄稿

三つの備え

小千谷第一団　団委員長　　海発　正之

平成16年10月23日17時58分。東京の出張から帰って来て一息つき、立ち上がった時突然「ドカアーン！」と大爆発のような衝撃があった。台の上の重いテレビが50cmも持ち上がった。「何だ！」と思った3・4秒後「ゴオー」とものすごい勢いで家全体が揺れた。咄嗟に「大地震、しかも震源地はすぐ近く。」と思い、家族に「伏せろ！」と言ったきり何も出来なかった。ただ「たのむ。早く静まってくれ！」と祈るだけだった。

台所にいた妻も、流し台にしがみつくのが精一杯。娘は倒れてくる食器棚の下敷きになりそうなところ次男に「危ない！」と助け出された事を後で知りました。

阪神淡路大震災の直後は、観音開きの扉にひもを通したり、玄関に電池を置いたり、冷蔵庫に2リットル水を備えたりしていましたが、9年の歳月が経つうちに、みんなどこかに行ってしまいました。災害は忘れたころにやって来ます。備えは日頃から必要です。

まず「物の備え」です。最低一週間の食料や水の備蓄です。一週間の期間があれば救援活動が整ってきます。最低限の「物の備え」があれば、”自立”できます。ボーイスカウトなら当然それができるでしょう。そして、全体の復興を支える事となりましょう。

次に、「行動の備え」です。災害時の避難場所を必ず、家族でしっかり確認しておく。地域の防災訓練などに参加する。湧水や井戸の位置を確認しておく。ボーイスカウトは当然、地域の湧水を知っているでしょう。

最後に「心の備え」です。天候気候は天与のもの、思い通りにはなりません。それに対しては、

○「順応」（そのまま素直に受け取り、少しも不足に思わないこと）

地球は目まぐるしく変化していて、東日本大震災のように大きな被害をもたらします。必然的に到来するものは、その通りに受けて順応するしかありません。

○「畏親」（えらい力だと敬い畏れ、なごやかな心で親しむこと）

「空を仰げ」と言われています。たとえ雲の日でも1日に1回は空を見上げ、太陽の上がる方向に気持ちを向けて頭を下げる。

これが日本人の農耕民族としての原点です。こうした自然を畏れ敬う「心の備え」があれば、おのずと「行動の備え」も出てくると思います。

感謝・合掌

アルブレヒト・デューラー画「祈りの手」

・・・・・・・次は　中条第一団　　佐藤　英行　さんにお願いします。・・・・・・・・

＜SFS役員会報告＞

6月3日にSFS役員会を開催しました。

＊SFS通信が日連の新会館3階にある、スカウトミュージアムに展示されることになりました。

4月13日にオープンしたスカウトミュージアムにはライブラリーが併設されており、各種記念物品はミュージアムに、書籍類はライブラリーに保管展示されます。SFS通信はライブラリー展示となると思われます。

平成18年8月発行の第1号から平成24年3月発行の第25号までキングファイルに納めました。今後継続してバックナンバーのファイルが可能となりました。県連ホームページへの掲載に合わせ、今回の処置でハード・ソフト両面での公開体制が整いました。

SFS通信はOBから成る組織の機関誌ということで、大変珍しいと評価されています。委員諸氏のお力で、この火をますます輝かせていただきたいと願うものです。

＊SFS委員の募集！！・・・申し込みは県連事務局へお願いします。

現在登録委員数は、下越地区8人、新潟地区22人、中越地区15人、上越地区10人で合計55人です。秋の全体集会参加者数は15～20人程です。

もう少し若返えるために元気な方の参加を願っています。SFS委員会は本来OBの組織ですが、現実には各団での役職をお持ちの方が大半です。日々スカウトに接する役をお持ちの指導者への支援と、ご自身の生活の彩りを増す機会作りとして次の方々の参加をお待ちします。

BSからは離れていないが、毎週日曜日にスカウト活動に参加することはしていない。このような方にぜひお声掛けください。入会費は3000円で、年会費は不要です。

＊6月24日　BSラリー（新潟市鳥屋野潟スポーツ公園）で募集活動を行いました。

参加メンバーは合計8人。ブースや展示物のセットを終え、昼食の後、12時から約2時間、公園内を隈なく回遊し勧誘説明と資料配布をしました。資料配布数80部でした。小さいお子様連れの保護者の方とのお話はそれなりに楽しいものでしたが、残念なのは2～3歳児が過半を占め、募集の即効性は期待できないようです。保護者の方との会話を通して、face to faceでの募集が大切なことだという思いを強くしました。

次回は、9月9日　CS・BVSラリー（弥彦公園）でおこないます。委員の皆様の参加をお待ちします。

＊2015年開催の23WSJ（山口）にSFSで見学に行き、ついでに周辺の観光地で楽しもうというアイデアが出ています。参加スカウトの保護者の参加も歓迎したいなど・・ある程度具体化した段階でお知らせします。

＊【第7回SFS全体集会】の予告

今年は下越地区担当です。全体会議の後、豊富な歴史遺産の見学をしていただけるよう調整中です。また、今回は海辺の宿で朝の海岸散歩も入れる予定です。10月21日（月）～27日（金）のなかで、宿の比較中です。次号で詳しく報告します。

SFS委員会事務長就任のご挨拶

新潟第11団　団委員長　　斎藤真憲

事務長就任のご挨拶に代え、拙稿・拙文を寄稿させて戴きたいと存じます。

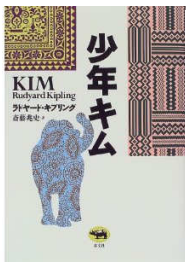
さて、”ボーイスカウト運動・活動の根本原理を形作っているものは？”と問われますと、私達は躊躇なく、ベーデン・パウエル卿の1890年から始まったボーア戦争での9歳以上の少年達で構成した偵察隊の活躍が大変な誘因力をもっていると答えると思います。

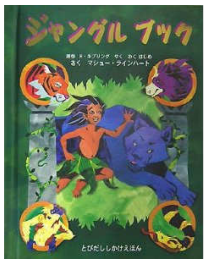
そして、卿の、”きちんとした体制・組織で、きちんとした指導思想と指導力の下で訓練をすれば、少年達はそれなりに素晴らしい力を発揮し得る”と言う信念は、当時のイギリスの青少年を取り巻く劣悪な環境を抜本的に改善出来る大きな波に成り得ると言う思いを更に強固なものにしたに違いないと思われます。

当時のイギリスは産業革命の終末期でもあり、青少年を取り巻く環境は劣悪の極みであった様で、10歳にも満たない子供達の就労や生活習慣の劣悪さや風紀の乱れはまさに悲惨であり、国家組織は勿論、全土の教会が夫々に孤児院やら養育院、救貧院を作り、青少年の信仰を中心とした善導に全力を傾注していた状況でありました。

その頃の様子はプロレタリアート文学の先駆者・チャールズ・ディッケンズ（1812～1870）の数々の小説の中に遺憾なく表現されていて余すところがありません。彼のその時代を描き出す力量と、それによって描き出された庶民の悲壮感や逞しい生活感には何度読んでも感嘆致します。余談ではありますが、私の卒論のテーマ作家であり、研究はライフワークでもあるのです。

まさにこの時代は卿の少年達を善導して行きたいと言う強固な信念を実現させていく環境が整っていたと言う事だと思われます。





この様な卿の信念の必然的な成就を求める時代背景と共に、その具体的な施策の一部として影響力を持ったと考えられ、実際多くこの活動の中に取り入れられているアイデアをもたらしているのが、卿がアフリカに渡る前の駐屯地であるインドを背景とした小説”ジャングルブック”（1894年）、そして”キム”（1901年）があげられると思います。

これらの小説は、その当時の著名な作家・ラドヤード・キプリング（ノーベル文学賞第一回受賞者・1907年）が書いたものですが、その内容は、発想力豊かな卿の人格や数多くの貴重な実経験に結びつき、卿に対して大きな影響を持ったものと考えられます。

因みに”キム”は”キムスゲーム”としてスカウト活動だけでなく様々な場で利用されていますね。

イギリス人を父親に、インド人の母親との間に生まれた冒険心旺盛な孤児、そしてずば抜けた記憶力や観察力を持つこの少年の冒険譚は、単なる一少年の冒険小説としての存在では無く、当時のイギリスとロシアの政治的、軍事的な背景を考えながら読むと一層その素晴らしさと深みを増す様です。このロシアとイギリスのインドを巡る確執は、NHK出版の”破滅への航海”（上下2巻）と題されたバルチック艦隊の東洋への派遣の前半部分に、不凍港を求めて極東とインド洋に侵出せんとするロシアの意図と焦り、更にそれを阻止せんと爲る英国や日本の企図が良く表現されていて興味を掻き立てられます。

さて、そろそろ本論に入りたいと存じます。

私達は、この素晴らしい運動・活動を生み出した根拠を考えている訳ですが、私はここで一つ拙考をご提示したいと存じます。

私達の殆ど誰もが少年期に”15少年漂流記”(英語では”Two Years Vacation″)を読んだり、或いは読み聞かせて貰った経験があると思います。しかし、それを大人に成ってから、二度、三度と読み返す人は数少ないと思います。私もその中の一人だったのです。しかし、この運動に関わるようになってから、子供達との活動の中で、様々なヒントを探し求める中で、ふとこの小説の事を思い出したのです。そして再読していく内にこれは凄いと思われる啓蒙的な事があったり、また、先ず自分が勉強して見てスカウトに紹介してみたい数々のヒントがあったのです。

例えば”流れに塵一つないのは水源が近い事を示す”と言う様な貴重な示唆や、”三角法ではなく自分の足で測った距離を、煤を水で溶いて作ったインクで書いた地図”、”獲物を獲る為の落とし穴の作成法”、”動植物や鳥類の分類の知識や採集、狩猟、調理の方法”、”一日として無駄にしない生活計画と実践”、”筏作り″、”以前の遭難者の遺骨の埋葬や慰霊等の宗教面の敬虔さ”、”信号弾の作成”、”木工技術”、”土工技術”、”飲料水の確保の努力。特に厳冬の凍結時の飲料水の確保方法”、”家畜の飼育技術”、”食料の貯蔵技術”、”裁縫技術”、”通信技術”、”人間の乗れる凧の作成技術”、”射撃”、”観天望気能力”、”動植物の棲息状況から緯度や経度を判断する高度な技能”、又、紐の両端に石をしっかりと縛り付けた”投げ弾丸”と言うアフリカの原住民の投擲用具の作成とその実際の投擲法、そしてそれはボア―戦争の時のペイジ軍曹の”空き缶利用の手榴弾”を連想させるものであったり、孤島での子供達の具体的な仕事の分担や生活日課の無理のない遵守等示唆に富む部分であったりなのです。

上述の様な技能の啓蒙・啓発は子供達にとっても当然興味深いものでありますが、更にこの小説の主題的なテーマである”自然に対する人間の対応の仕方、人間観、子供同士の人間関係の保ち方等”が私達の運動・活動の誕生、創設に一つの根幹的な影響を与えていたのではないだろうかと言う事であるのです。

又、この小説の最後の部分に、”勿論、今後如何なる小中学生も、この様な夏休みを送る事は有り得ない。だが、少年達が、なんであれ、困難に直面した時には、勤勉、勇気、思慮、熱心の四つがあれば、必ずこれらに打ち勝つ事が出来ると言う事だ。チェアマン学校の14人の生徒は、2年間の島の厳しい生活の中で、すくすくと成長した。幼年組も逞しい少年に、年上の少年達は、一人前の青年にーー。”と言う結びの一節があるのですが、私は、この”勤勉、勇気、思慮、熱心の四つ”の部分に大変スカウト活動に似通った印象を感じているのです。何か”ちかい”とか”おきて”の精神に通ずるものを感じざるを得ないのです。

更に又、この少年達の挿絵の姿には”木の杖”を携帯している姿が描かれているのですが、これは”スカウトの杖・儀仗”を彷彿させるものであり、やはり影響を受けているのではないかと考えられます。

或いは、ゴードンのブリアンとドノバンの言い争いに対して、”喧嘩は止めたまえ。議論する時は、相手の意見をよく聞かなければ駄目だ”と言う発言部分も、1908年に制定されている。”Scout Law″の精神の本質を構成しているような気がするし、ゴードンの”自分には帰還を待ち侘びる両親も兄弟も無い。この島に生活を築き上げて行く事は、自分の力を試す絶好の機会”と強い信念覚悟を示す言葉等は”スカウトはどんな状況にあっても口笛を吹く”に関連する様な気がしないでも無い。牽強付会かな？

再びゴードンの”この島では全ての少年達が、夫々一人前の人間として働き、考える様になって欲しい”と言う考えから、三つの約束が定められ、英国の寄宿制の学校の習慣である”年少組が年長組の靴磨きや食事の運搬等”を廃止した。

その三つの約束は

(1)一度行おうと決めた事は、必ずやりぬく事。

(2)機会を失ってはならない。

（3）疲れる事を恐れるな。疲れる事無しには、値打のある仕事はなしとげられない。

上述の精神も”Scout Law”に通じるものであり、ブリアンは、ゴードンが、年少組に対して”規則一点張り”で些細な事にも厳格に対処するのに対して、”そんな小さな事でと思うかも知れない。だが、少年達の生活は社会の縮図である。人間は、子供の時から、一人前の大人の様に扱って貰いたいものなのだ”と思索するのですが、これは私達スカウト指導者が”小さな紳士”としてカブであろうとビーバーであろうと、接し、扱わなければならない根本的な精神、態度と重なり合う考えの様です。

そして、もう一つ、題名は”15少年”なのに、この結びの部分では”チェアマン学校の14人の生徒”となっている所にも注目したいのです。一人人数が不足をしているのですが、これは何故なのでしょうか？それはチェアマン学校の生徒は白人の14人であり、後の一人はこの漂流記の元となった”スルギ号”と言う帆船付のコックの黒人の少年であったからなのです。後述しますが、この黒人少年は、無人島での生活の中でも、学習活動にも参加せず調理専門で、子供達で決める大統領の選挙にも選挙権も、被選挙権も認められていないのです。あからさまな人種差別である印象が強く、私には唯一この小説で納得の行かない部分なのです。奴隷貿易廃止の原則は1815年ウィーンで明示され、イギリスでは1833年に、アメリカでは1865年に奴隷制は廃止になっているのにです。この点スカウト運動は極めて明確に人種差別等を否定していますね。素晴らしい事だです。

更に具体的に私達の活動との類似点を求めたり、参考点を求めていく前にこの小説が書かれた時代を考えて見たいと思います。

この小説は1888年、フランス人の作家ジュール・ベルヌによって書かれています。彼の書いた小説は50冊以上もあり、その全集さえ組めない程多作の作家でした。しかし、彼が空想として描いた様々な文明の装置や器具、機械の80％以上が現在実現されているそうですから凄い人であるには違いありません。

彼はこの小説の設定時期を1860/3/9として書き始め、更にダニエル・デフォー（1660～1731）の”ロビンソンクルーソー”が大流行し、少年達の愛読書であり、漂流船の図書館にも蔵書として揃えられて居たとも書いています。

THE
LIFE
AND
STRANGE SURPRISING
ADVENTURES
OF
ROBINSON CRUSOE,
OF YORK, MARINER:
WITH
LONDON:

”ロビンソンクルーソー”は1719年に彼が59歳の時の作品で、原題は”The Life and Strange Surprising Adventure of Robinson Crusoe”となっています。この小説も私はわくわくして読んだものですが、続編もあったりで、少し気怠い感じがしないでもありませんが、その点は思想家、政治批評家、風刺家でもあった彼の事ですから仕方がない面があるかも知れません。更に、ベルヌは”スイスのロビンソン”と言う作品もこの少年達の間で大人気であったと書いていますが、私は読んだ事がありません。どなたかお持ちでしたら是非読ませていただきたいと存じます。

以上の如く、この小説が書かれた時期を私達の活動が始まった時期とを比較していただきたいと思うのです。如何でしょうか？極めて不思議な程重なり合っていますよね。

更に私が、この漂流記がスカウト運動の創始に与えたと思われる影響を考え始めたのは、日本では既に明治25年に森田思軒と言う方が英語版から翻訳を完成していることもあるのです。明治25年と言うのは1896年でありますし、しかも仏語版からでは無く、英語版からですから当然英国でも大人気であったと考えられます。但し、庶民に読まれていたか否かは？ですが。1907年にこの運動を創始したベーデン・パウエル卿の目に留まらなかったとは考え難い事です。でも、一見仲が良さそうで、実は事ある毎に確執、抗争を繰り返して来た英国と仏国ですから、”そんなもの参考にするものか！英国人独自の発想である！！”と言われればそれまでですが。皆様のお考えは如何でしょうか？

さて、それでは最後に、この小説の冒頭の部分の粗筋と15人の少年達の人間描写を簡単に拾い上げ、後は皆さまの読書のお楽しみに委ねたいと思います。

＊1860/3/9。英国領ニュージーランドの首府・オークランド市にあるチェアマン学校の14人の生徒を乗せてニュージーランド一周の旅に出る予定の100 tonの帆船スルギ号は出港を明朝に控えて、スルギ号の船長、航海士、そして6人の船員は、黒人のコック・モーコー少年と生徒14人を船に残し酒場に出掛け、その留守の間に乗船していた一人の少年の悪戯からこの小説は端を発するのです。

それではこの小説に登場する15人の少年達を少し理解し易い様に整理して置きます。

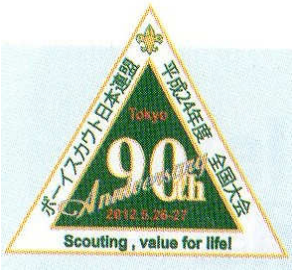
名前	人種	国籍	年令	人柄	備考
モーコー	黒人	英国	12才	船付コック　従順、温和で自分の任務に忠実な努力家	中立
ブリアン（弟の不始末を告白され危険な仕事を常に引き受ける）	白人	仏国	13才	指導力抜群で、堅実で我慢強い智慧者。船の知識あり身なりは構わない。スポーツ万能。記憶力抜群。明朗でクラスの人気者。フランスから移住して来たので航海の経験あり。小さな子供達の面倒をよく見るので、年少組からの信頼厚い	2代大統領
ゴードン	白人	米国	14才	穏健で堅実、争いを好まない人格。優等生。両親は無く養子となって来た。知識豊富。	初代大統領
ドノバン	白人	英国	13才	成績抜群ではあるが、多少自惚れ屋で高慢気味。父親は大地主。クラッスと従兄弟。	ド派
バクスター	白人	英国	13才	温和。手先が器用。父親は商売をしている。	ブ派
アイバーンス	白人	英国	13才	釣の名人。父親は教師。	ブ派
クロッス	白人	英国	13才	ドノバンの従兄弟。極めて平凡な性格。父親は大地主	ド派
ウェッブ	白人	英国	12才	成績は中位。我儘で喧嘩好き。	ド派
サービス	白人	英国	12才	冒険好き。父親は大農園主。モーコーの助手を勤める。	ブ派
ウィルコックス	白人	英国	12才	成績は中位。我儘で喧嘩好き。	ド派
ジャック（不始末のお詫びに危険な仕事を引き受ける）	白人	仏国	8才	ブリアンの弟。学校一の悪戯者。スルギ号の艫綱を外し、漂流事件を引き起こした。父親は沼沢地の灌漑工事の技術者	ブ派
ジェンキンス	白人	英国	9才	父親は王立科学協会会長	ブ派
ドール	白人	英国	8才	大食い。父親は海軍士官	ブ派
コスター	白人	英国	8才	意地っ張り。父親は海軍士官	ブ派
ガーネット	白人	英国	8才	スルギ号の所有者の子供。アコーデオン奏者。サービスと仲良し。父親は退役海軍士官	ブ派
犬・スワン					

最後になりますが、子供達が南十字星に祈りを捧げる描写があります。常に”祈り”と”感謝”を捧げられる人格に私達も成りたいものですし、スカウト諸君にもその心を持って貰えたらどんなに素晴らしい事でしょうかね。それが出来れば、私達が神仏から委ねられた任務の大半は為し得たと思っても過信では無いでしょうね。その為にはスカウト諸君の親御さん達のお世話も極めて大切ですね。

拙稿お読み下さり有り難うございました。事務長として能力不足かもしれませんが、宜しくお願い致します。

平成24年度全国大会報告

県コミッショナー藤田義夫（加茂1）



今年度の全国大会は、5月26日（土）～27日（日）、東京代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで、日本連盟創立90周年の記念事業の一環として、皇太子殿下を特別来賓にお迎えしての中央式典がメインの行事になりました。例年行わている事業報告・決算及び事業計画・予算についての説明などはありませんでした。しかし、他の大会行事である、指導者向けのテーマ別集会（5テーマ、各2回）と、スカウト・一般向けの「春のキッズフェスタ」をガールスカウト・YMCAなど5団体の共催で実施され、カブ・ビーバーなど制服を着たスカウトも一般の子供達と一緒に、各種の体験コーナーを楽しんでいました。

全国大会は、隔年で東京と地方で開催されますが、近くで開催の折には、ぜひ参加して指導者研修のためのテーマ別集会、一般向けを含めた展示コーナー・体験コーナーに参加してみてください。

ちなみに、来年の開催地は香川県とだいぶ遠方になりますが、うどんを食べに行くのも良いかと・・。

平成24年度　日本連盟コミッショナー活動方針について

今年度、日本連盟コミッショナーが代わり、重点方針等も一部が見直されました。平成24年度スローガンは「スカウト運動の基本に基づいて、より良いスカウトを育てよう！！」（班制教育の徹底！！）であります。重点方針として、隊指導者の育成教化、保護者に対する啓もう・周知、野外活動を通してのスカウトの育成、団・隊への支援強化等、多岐に亘って活動計画が策定されております。これらの説明について、団委員（長）・隊指導者にお伝えする機会を作りたいと考えております。

今のスカウト運動の最大の課題は、スカウト数の減少と班制教育の維持です。これは活動の単位である団・隊の弱体化も原因と考えられます。団・隊の活性化と数の回復によって、スカウト1人ひとりを良き社会人に育成していく環境が整い、この活動の目的につながっていくものと考えます。。

それと、本来この運動の目的を達成するため、創始者が考案した方法が出来なくなったり、忘れられたりしているのではないでしょうか。小集団（班制教育）活動を活発化させ、スカウト活動の楽しさに目覚めさせ、自発的に活動させる事が重要です。

日本連盟コミッショナーは、本年度あらためて、この運動の本質を再認識し活動を進めるため、アクションプランを提案しています。具体的には、

①楽しくなければスカウティングでない。

②知性と野生を高める。

③社会に認められる

これらについてプランを立て、身近なコミッショナーと協力して、団・隊の現状を把握した上で、支援を行っていく方針も示されました。

実施にあたっては、団委員長のご協力が欠かせないものであります。団・隊ひいてはこの運動全体の活性化のため、よろしくお願いします。

トキ最新情報とスカウト活動

佐渡第2団　団委員長　**静間和憲**

＜餌をついばむトキ＞

トキ情報については、各紙各局などのマスコミ報道により、皆さん方は既にご承知の事と思います。ここでは最新のトキ情報のほか、これまでに島を挙げてとり組んでいるトキ保護に関する活動の経緯や、私どもが団活動として関わることができそうな事項について述べてみたいと思います。

先ずトキ最新情報といたしましては6月15日現在、3組のつがいから8羽のヒナがふ化しうち2組のつがいのヒナ6羽の巣立ちが確認されています。残りのつがいの2羽のヒナも6月下旬までには巣立ちが見込まれています。ところが巣立ちした6羽のヒナのうち予定より早く巣立った1羽の行方が一時把握できない情況があったそうです。しかし4～5日後の12日夕刻、巣の近くにいるところを発見され無事が確認されました。なにしろ幼鳥は自分で餌を探して摂ることや外敵から逃れるなどが難しく、目指した枝にとまることさえも容易ではないのです。しかし、環境省は原則的には幼鳥の野生定着を優先させ、あくまでも見守るだけにし、ケガを負うなどよほど深刻な事態以外は捕獲・保護は行わないそうです。

トキたちは農薬の普及など昭和以降の棲息環境の悪化により、絶滅寸前に追い込まれました。1981年佐渡に残っていた全5羽が捕獲され、ついに佐渡の自然界からは姿を消してしまいました。その後は中国の援助で人工繁殖に成功し、2008年9月25日には秋篠宮様ご夫妻をお招きして第一次放鳥が行われたことはあまりにも有名です。放鳥の様子をTV等でご覧になられた方も多いと思います。順化ケージで採餌や飛翔の訓練を受けた10羽のトキたちが、大観衆の見守る中を大空に向かって飛び立ったのでした。この時のやり方はいきなり放鳥場所で飛び立たせるハードリリースと言われ、トキたちはかなりのショックを受けたようでした。二次放鳥以降は訓練されたトキをケージのネットを開けて自然に飛び立たせるソフトリリースで行い、本年の6月8日の六次放鳥までに91羽が放たれ、トキの野生復帰はかなり順調に進んでいます。なお、91羽のうち佐渡島内には57羽が棲息していると見られています。残りのうち31羽の死亡が確認されており3羽が島外にいるかあるいは所在が不明だそうです。

このたび36年振りの喜ばしい「ヒナの巣立ち」を迎えるに至った佐渡には、トキを守る人々の活躍が数多くあるのです。環境省関係の機関や施設に関わる人々の努力は別にして、次に示すような団体や組織が存在し、所属している方々が長期にわたってご尽力をなされています。トキの故郷とも言える人里離れた生椿地区の自然を守ろうとする「生椿の自自然を守る会」、長年トキの生態研究など保護に尽くされた「佐渡トキ保護会」、平成14年に発足し旧トキ保護センターが設置されていた小佐渡山中にある清水平を拠点にビオトープづくりと維持管理に努めているNPO法人「トキどき応援隊」、多様な生物との共生を目指した農業に取り組む「佐渡トキ田んぼを守る会」、農家や子どもたちと共に生きものを調査したり育てたりして市の認証米の普及活動にも取り組む「（社）佐渡生きもの語り研究所」、トキの行動を観察し続け情報を共有しながら保護に努めている「トキモニタリングチーム」などの団体や組織が島内各地で活動を続けています。

またトキ放鳥の地とも言える新穂正明寺地区にある行谷小学校をはじめ、多くの市内の小中学校では、トキ保護に関する学習や活動を「総合的な学習」に組み入れています。環境省の自然保護官のお話を聞いたり、トキの餌場確保に向けての「ビオトープの整備」や、田んぼや小川に棲むトキの餌となる生きものの調査などを学習テーマに取り上げています。さらに各校の4～6年生から結成された「佐渡kids生きもの調査隊」も48名の隊員で活躍しています。

以上の様なトキを巡る環境の中で、佐渡2団もスカウト活動としてトキ保護に関わる活動や体験を検討していかなければならないと考えています。既に年間計画に組み入れ実施している生物たちの生息環境浄化を目指した『野外清掃活動』をはじめ、『ビオトープ整備の体験活動』や『水中生物の調査活動』、トキに関する知識を学び観察やガイドの訓練、またトキ情報の提供が出来るような『トキモニタリング』などについて学び、一歩でも二歩でもトキ保護活動に協力できるよう検討して行きたいと思っています。

＜野外清掃活動＞